



日本記者クラブ
「新国立競技場整備事業」

木を使い杜との調和めざす

建築家 隈研吾氏

2016年2月1日

異例の再コンペの結果、2020年東京五輪・パラリンピックのメイン会場である新国立競技場の建設は、国内外で活躍する建築家、隈研吾氏の設計案にゆだねられた。当初採用されたザハ・ハディド氏の設計案は斬新で未来的な競技場であったが、隈氏の案は柔らかく、木材を多く利用するなど日本の伝統的な美を随所に盛り込み、落ち着いたものとなった。

少年のころに見た代々木体育館のすばらしさが建築家としての原点だという隈氏。自らの生活場所にも近い新競技場を環境に配慮し、人々が居心地よく過ごせる空間とするべく設計にあたったという。「人間にとって木の温かさが感じられるような建築を作ることが私の一種の使命」とし、自然と共生する新時代の建築のあり方について熱く語った。

質疑では、一部で指摘されたザハ案との類似性についても詳しく、丁寧に説明し、注目の工期についても「五輪までに間に合う」として、新競技場建設をめぐる懸念の解消に努めていた。

司会：瀬口晴義 日本記者クラブ企画委員（東京新聞）

[YouTube 日本記者クラブチャンネル](#)

※本文の後に資料を添付しています

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会＝瀬口義晴企画委員(東京新聞) 隈研吾さんは、1954年神奈川県生まれ、東京大学大学院修士課程を修了後、1990年に隈研吾建築都市設計事務所を設立。慶應大学教授などを経て、現在東京大学の教授をされています。

新歌舞伎座をはじめ、サントリー美術館や根津美術館、また浅草文化観光センター等々、海外にも多数のプロジェクトを抱えています。現在も100件ぐらいのプロジェクトを抱えて、年の半分は海外にいらっしやいます。

新国立競技場の建設は、いろいろ迷走しましたけれども、いよいよ隈さんが設計された建築が本格化するということで、新国立の問題を中心にお話をさせていただきたいと思います。

「木を使う」自分の使命

隈研吾氏 きょうは私の建築のお話をしようと思うのですが、当然皆さんが関心を持たれているのは新国立ではないかと思しますので、新国立の絵からお話をさせていただきます。

新国立のチームのメンバーは、大成建設さんと梓設計さんと私どもです。このメンバーでコンペに出しまして、選定を受けました。

これが皆さんごらんになっている完成予想の絵です(資料参照)。実は、私の事務所がこのそば、外苑前の駅のところにあって、いつもこの前を通過して通勤をしています。

(新国立計画が)どうなるかなと気になっていたのですが、第1回目のコンペのときは参加資格が非常に厳しかったのです。海外の建築家協会のゴールドメダルとか、大変な大御所でないと思えないようなコンペでした。僕なんかはお呼びじゃないかと、1回目は出さなかったのです。その後、建築界を巻き込んでの大きな議論になって、自分の周りの神宮の森もどうなるのだろうと気になっていたところ、大成建設からコンペのチームに入ってくれと言われ、参加させていただきました。

前の国立競技場の中にジムがありまして、私は学生時代そのジムにしょっちゅう行って、汗を流していたので、あの前の建物も非常によく知っています。脇のテニスクラブでもよくテニ

スをしていました。この杜は、ある意味、もう自分の庭のような杜です。この杜こそが中心だろうと、杜の競技場、杜と調和するにはどうしたらいいかということを考えてみました。

建物は、なるべく低くということからまず考えたのです。一番高いところで49mにおさえました。これは結構大変です。いろんな中身が決まっていますから。B案のほうは5mぐらい高くて、もともとのザハさんの案は75mでした。49mというのはかなり抑えられた。そのときに、まず一つ安堵しました。

それから、木をなるべく使いたいと思いました。ここ10年ほど、木を使うことを一種の自分の使命であるとも考えています。20世紀は工業化社会でして、木の建築が迫害された時代でした。コンクリート、鉄で建築を作った時代が20世紀です。私が入った大学の建築学科でも、コンクリート、鉄しか教えてくれないのです。木で作るということは教えてくれないような時代でした。いまは少しずつ変えています。

木を使うということは地球環境にとっても大事なことです。木を使って長もちさせること、これが非常に重要です。木を使っても、すぐ燃やすのではまた二酸化炭素が空に戻ってしまいます。木を使って長もちさせるというのが地球温暖化対策として非常に効果があるという結果が出ています。

さらに、木を計画的に使うと森が健康な状態で保たれる。しかも、人間にとって木の温かさが感じられるような建築は人間の精神的健康につながります。ここ10年、そういう気持ちで木の建築をいろんなところで作っています。

代々木の体育館を見て建築家志す

個人的な話になりますが、1964年のオリンピックのとき、私は10歳でした。丹下健三さんの設計した代々木の体育館に、父親に連れられて見に行き、「すごいな」と感動しました。そこで、こういうのは建築家という職業の人が作るのだということを知りました。こうして私は建築家になろうと思ったのです。

それまでは獣医になりたいと考える、おとな

しい子どもでした。10歳のときに代々木の体育館を見て、建築家という仕事を知ったのが私の人生の転機でした。今回2020年のオリンピックに携わることができたのは、何か因縁のようなものも感じています。

建物の話に戻ります。高さを低くしたうえで、周りの柱と調和するために木をふんだんに使っています。コンコースの周りの部分を下から見上げると、木の軒のようにデザインしています。その軒のようなデザインが、これも日本の伝統建築の「わざ」です。日本のお寺や神社は、下から見上げると軒が見えるわけです。軒のところは木の垂木や組み物とかが使っていて、そこを見て、木の温かい感じが伝わるようになってきています。「木の軒」のをテーマにして、それぞれの断面を決めていきました。

さらに、建物はなるべく緑化をすることによって周りの柱となじませようと思いました。いま、緑化の技術が非常に進歩していますので、メンテナンスコストがかからないで、しかも東京の野原のような緑を楽しめる。

一番上は一周850mの遊歩道になっているのですが、この遊歩道でも緑の脇を歩いて回れます(資料参照)。柱を上から見る視点ですね。今までは上から見る視点がありませんでした。きっとここで、走路として走る方もいるだろうし、ゆっくり歩く人もいるだろうし、ベンチでずっと柱を見ている方もいるだろうと思います。そういう使い方ができる場所として、ここに「空の柱」と名付けました。

軒のある庇は、風を中にうまく導く工夫でもあります。そういうための断面形状になっていて、これは後でまた説明します。

競技場の芝生は自然の芝なので、光がある程度当たらないと育ちません。それを厳密に計算してガラスの屋根の形を作っています。

サウスゲートから建物を見ると、軒の垂木状のデザインになっています。その上に緑が生えて、この緑は、剪定が最小限で済むように、東京の野の草、野の木を配置しています。

今回は自然の換気でいこうという方針が示されていました。私もその方針には共感しています。何でも空調すればいいというのは、石油

がうんと安い20世紀の発想で、これからは自然換気の時代です。庇の計上は、自然の風を入れられるように考えています。

法隆寺の五重塔も、下から見た軒、垂木が美しく、日本建築の表現の中心です(資料参照)。五重塔を上から見ると人はいないので、大体下から見て、ありがたい感じがするのです。木の建築という感じが一番伝わる一瞬です。

競技場近くの明治神宮も同じように、軒が重なっています。明治神宮の神社の美しさの中心はこの軒なのです(資料参照)。こうした日本建築の知恵を現代的な形でいまの建築に生かしたいと思っています。

法隆寺の建築は7世紀とされ、世界最古の木造建築と言われていますが、その建築がいまでももっている。木は、うまい形で雨にかからないような断面計画にして、それでも傷んだところは交換可能、交換容易なようにしていけば、木の建築は何百年どころか1,000年ももつ。コンクリートは100年もたすのもなかなか大変だと言われています。それに比べると木というのは非常に強い、しぶとい素材です。木をもう一回建築に取り戻していけたらいいなと考えています。

自然の力を利用して気持ちのいい環境を

屋根は木と鉄のハイブリッド構造です。普通、木と鉄のハイブリッド構造は、木を真ん中にして鉄で挟みます。それだと、下から見上げると鉄が見えてしまう。そこで私どもは、普通とは逆に、鉄を木で挟みました。下から見ても木が一番見えます。そういう断面構造なのでスタジアムの中に入ると、わあ、木でできている、何か違うな、木のおいもするな、と感じていただけたと思います。

屋根の先端に太陽光パネルが見えます(資料参照)。ここはガラスの中に太陽光パネルを入れていて、下から太陽光パネルが見えるのです。普通の太陽光パネルは屋根の上であり、下から見えない。今回は観客席から見える位置に、太陽光パネルがついています。

スタジアムは、全部同じ断面で回っています

(資料参照)。そうすると、コストを抑えることができます。また、同じ断面を全部繰り返しているわけですから、当然工期も抑えることができるというメリットがあります。

第一次のザハさんのときは、サドル型といひまして、両側が高くなっている。我々は、逆に水平であることのほうがコスト、工期も有利だし、観客席も水平であることのほうがウエーブもやりやすく、一体感が出ていいと考えました。

「風の大庇」と呼んでいるものによって観客席になめるように風が来て、涼しい風を送ってくれます。逆に北側の部分の風の大庇の垂木のピッチを変えて、それによって冬は風が上にいくように計算しています。ピッチが少しずつ方位によって違うという細かい計算がしてあります。それによって、夏は涼しい、冬は寒い風が上に逃げてくれるわけです。そのほかにも、この部分に特に席をたくさんとって、臨場感があって見られるような断面を工夫しています。

いまは環境の時代です。ランニングコストがかからないで、しかも自然の力を利用して気持ちのいい環境をつくるというのが世界の建築界の中で大きなテーマになっています。我々の考えもその一つです。

「空の杜」は一周 850m で歩けるところです。直通の階段で下からあがれます。競技をやっているときも、下から来られるようになっていきます。競技は競技でやって、ここはいつも市民に開放されているオープンな空間です。

ニューヨークにハイラインというのがあります。古い鉄道の高架線の上に遊歩道を作ったものです。あそこも緑がたくさんある、とても気持ちのいい緑の公園で、ニューヨークの市民に愛されている空間になっています。東京の中で、こういうハイラインのような空間ができればいいなというふうに思ったデザインです。

「渋谷川のせせらぎ」の復活

「渋谷川のせせらぎ」の復活も一つのテーマです(資料参照)。渋谷川は、新宿御苑を水源にしてこの競技場のあたりを通り、渋谷に至っていたそうです。それを復活できたらと考えま

した。循環式の水を流し、楽しめる水辺空間ができます。水の循環や樹木の灌水システムには、太陽光パネルで作られた電力が使われます。

このような木の建築を、ほかのところでもいろいろ試みています。浅草の文化観光センターは雷門の向かい側です(資料参照)。我々はコンペで木造の平屋が重なったような建物を提案しました。それぞれの階にいても地面の上に建っている木造の建築にいるような安心した気持ちになれるのではないかと、コンクリートの箱にいるという感じにはならないのではないかと、という提案をしたわけです。

ここでも軒が重要でして、軒があることで太陽光をカットする、下から見上げたときも、軒がつくる影が安心感を与えるようになっていきます。屋根と軒の間の三角形の場所に空調機を入れれば、無駄はなくて済みます。

木の技術の進歩

私が木に関心を持つようになって 20 年ちょっとですが、この間に世界の木の技術は非常に進歩しました。不燃化、燃えなくする技術、腐らなくする技術が大きく進歩したのです。

実はいま、海外でも木への関心が非常に高くなっています。むしろヨーロッパのほうが木の処理に関しては先進国です。日本は、木を組み立てる技術では世界一だと感じるんですが、木を不燃化する、腐らなくする技術ではヨーロッパが先を行っています。ヨーロッパでは、中層建築を木造で全部作ってしまう。日本はまだ法律の整備がこれからです。

中国とか韓国でも仕事をしているのですが、行く前は、地方に行けば大工さんがいっぱいいるのだと思っていました。それが、ほとんど木造の技術は絶滅状態。木造の図面を見せると「コンクリートの 3 倍かかりますよ」と言われます。そのぐらいアジアの木造は絶滅です。日本はその意味では宝物を持っていると思います。

私がフランスで最初に完成させたプロジェクトがあるのはブザンソンというスイスとの国境の町です(資料参照)。川沿いの古い倉庫が使われなくなって、簡単に言うと、ちょっと

怖い場所で、誰も歩きたくないような場所だったのです。ここに音楽ホールと美術館と音楽学校、コンセルヴァトワール、それが一緒になったものを作るというコンペでした。

私どもは、川と町をつなぐ木の建物で、倉庫もちゃんと保存しますという提案をしました。断面で見ますと、倉庫が保存されていて、木の建物があって、真ん中に大きな穴があいていて、川と町をつなぐ。

川沿いには緑の遊歩道を作る。町沿いにも川の水を引いてきて、小川をつくって、生物もいるビオトープにします。こちらは町の「縁側」と呼びました。ちょうど庇がかかっているのです。これは「軒庇」という私が一番重要視している建築のやり方ですが、庇があって、雨に濡れないで散歩ができる町の縁側をつくる。

「縁側」「木漏れ日」は翻訳すると難しいので、「engawa」「komorebi」と、そのままフランス人に説明しています。ブザンソンの指揮者コンクールでかつて小澤征爾さんが24歳で世界一に選ばれましたが、このホールはそのために作られました。

コンクリートの箱の上に屋根

マクドナルド通りという通りがパリの北にあります。そこに面したエデュケーション・アンド・スポーツ・コンプレックス (Education and Sports Complex)、市民のための文化、スポーツ施設をデザインしました (資料参照)。

資料は1970年にアントレポット・マクドナルドができたときの写真です。500mの長さがある物流倉庫です。この建物を保存しながら、パリの北部の地域センターにしようというのがわれわれのプロジェクトです。

全体500mを5つに割って、5人の建築家がコンペで選ばれて、私どもは西端を担当しました。ほかの建築家はみなフランス人です。

私は、既存のコンクリートの箱の上に屋根を提案しました。

屋根で、市民を迎えてくれるような表情の建物がいいのではないかなと提案したわけです。ほかのフランスの方は、みんな箱の提案でした。

パリの新しい女性市長も2回もここへ来てくれ、非常に気に入ってくださっています。ここでも新国立と同じように屋根を下から見て木の軒が見えることが重要だと考えました。

フランス人は、「折り紙屋根」とか呼ぶのですが、私は別にわざわざ日本風にしたわけではなくて、屋根も、木も、基本的には世界共通のボキャブラリーです。いま世界中の関心がそちらに向かっているのではないかと思います。

世界が求める竹や木

中国でも最近木を材料に使うことを提案しています。「竹の家」というホテルを万里の長城の脇に設計しました。中国人はその竹の家をすごく気に入ってくれて、実は2008年北京オリンピックのときに、オリンピックのCMをその竹の家で撮影したのです。そのCMを見て、ああいう竹の家みたいな感じのものをつくりたいという中国人がすごく多くて、私どもは中国の仕事も随分やっております。北京オリンピックは張芸謀 (チャン・イーモウ) という映画監督がアートディレクションを担当しました。その彼が僕の竹の家をみて「ここで撮影したい」とCMを撮りました。それが私と中国の深いつきあいのきっかけです。竹や木という自然素材は世界中の人がいま求めているものではないかなという感じがしています。

今回のオリンピックも、単に日本を表現するということが以上に、世界中の人が求めているものを形にしたいと考えているわけです。

私からは以上です。ありがとうございます。

■ 質疑応答 ■

司会 ザハさんの案はものすごく巨大で、隈さんの案と全く違うのですが、スタジアムの設計について、ザハさんから、驚くほどレイアウトや座席の構図が似ているという表明もありました。これについてどうお答えになりますか。

隈 建物の外観とか、皆さん、ものすごく対照的と言ってもいいくらいだとわかっていただけだと思います。

断面に関しては、まず三段式というのを我々は採用しています。第一回目のコンペで、11社の応募があって、そのうちの7社が三段式です。というのは、三段式が避難の問題ですとか、ユニバーサルデザインの点でもいいのです。二段式にしてしまいますと、上のほうからおりてくるのが大変なのです。三段式が、8万人という規模で一番合理的だという判断をしました。

断面の形ですが、まずトラックの形が決まっています、どこまで見えなければいけないというのも決まっているわけです。それに従って断面の形を決めていくと、大体同じ断面形状に落ちつきます。

それから、通路と観客席のとり方も、専門的になりますけれども、避難の法規から席数も階段のピッチも決まってきます。

ザハ氏設計案の印象

司会 ザハさんの当初の設計案を見て、どんな印象を抱いていらっしゃいましたか。

隈 一言で言えば、ザハらしい。ザハさんとは海外のいろんなコンペで一緒しているのですね。彼女はコンペに非常に強いです。というのは、完成予想図がかっこいいわけです。模型とかでみても、ワーツと人目を引くので。コンペで一緒したときは、何回も負けています。それで、この最初案を見ても、ザハらしくて、格好いい案だなとは思いました。

しかし、槇文彦先生をはじめとする建築家はザハの建築は杜にあわないという運動をされました。私もあの杜を知っていてそういう感じはありました。

工期は守れるか

司会 伊東豊雄先生の案に勝ったのは、工期短縮が非常に評価されたという理由があると思いますが、本当に間に合うと言い切れますか。

隈 それは間違いないです。工期を短縮するために、同じ断面で全部回る、私どもは屋根も含めて全部が同じ断面でいけるようにしています。そうすると、工場でのプレハブ化もしや

すいのです。全部同じものをつくって運び込む。設計の最初から、工期が短いように、コストがちゃんとおさまるように、と心がけて設計しています。

もちろん普通の設計でもそうなのですよ。工期がどうでもいいなんていう設計はしていません。今回は特にその部分を注意しました。

質問 メンテナンスなどもお金がかからないようにと強調されていらっしゃる。先日、今後50年間で1,000億円という額を設計側で維持管理費として出されているという報道があったのですが、その額というのは高いと思われるか、安いと思われるか。

隈 メンテにかからないように、特に皆さんが心配された、木はすぐ腐ってしまうのじゃないかという問題と、それから草を植えていて、草は大変じゃないの、というご心配だと思います。木は、まず雨がつかからないような断面形状にしている。しかも、木の処理の仕方、K3とK4という、国土交通省の指定の処理の仕方があるのですが、数十年間木は交換しないで大丈夫です。植物に関しては、人間が行って手当てができる、剪定も人間が全部できるような断面になっています。植物のメンテは年間200万で済むという計算が出ています。

司会 では、50年で1,000億というこの数字は……。

隈 どれから出ていた数字なんでしょうか。

環境、コストを第一に考える

質問 デザインについて、ご持論として「奇をてらう目立つものよりも、むしろ人の心の中に自然と溶け入っていくような目立たないもののほうがいいのだ」とおっしゃっていたように聞きました。そのあたりをもう少し、ザハさんとの対比も踏まえてお教えいただければ。代々木の体育館は、目立つ構造として64年のシンボルとして残っていると思います。今回の2020年はどのようなシンボルにしたいのか。

例えば仮定ですが、可動式の観客席や開閉式の屋根をつくる必要性が出てきた場合に、屋根

も含めて取りつけられるような構造なのか。

隈 まず、建築が目立つべきか、これは建築界の大きな議論であります。丹下さんの代々木の体育館、あるいはその後の、私の先輩の建築家というのは、建築はモニュメンタルで目立つものが必要な時代の建築家だったと思うのです。ザハさんも私のちょっと先輩ですし、どうも私の世代ぐらいから、建築に対する考え方が変わってきているかなと感じています。

建築は税金の無駄遣いだし、環境破壊になるかもしれないし——そういうことで世の中の建築に対する見方がすごく変わったと思うのです。これは日本だけの話ではなくて、世界中でその変化は起こってしまっていて、ヨーロッパの建物でも、住民に対する説明が大変なのです。日本人が変なデザインをして、税金を無駄遣いしたのじゃないとか、記者の方から質問が来るわけですね。私は、これは普通の建物よりも安く、地元の木を使うことで地元の産業に役立つとか、説明して少しずつわかってもらいます。

本人が行って説明しないと、特に向こうの文化は、広報担当がしゃべったのではだめです。それで市民の人たちと、ああ、あののなら大丈夫かな、と感じてもらおう。一回で終わらないで、何回もそういうことをやっていますので、建築に対する目が厳しくなったことを実感しています。建築というのは考え方を変えなければいけない。単に目立つというものではなくて、環境とか、コスト、そうしたことをまず第一に考えていかないと、そもそも建築家などという職業自身が要らないと言われるのではないかとさえ思っているわけです。

中国などは、いまでも目立つだけの超高層をバンバン建てているという感じですが、その中国でも、若い人は変わってきています。僕の竹の家を好きな人は、大体若い人が多いのですけれども、そういう人たちは、中国の建物に文句を言う。嫌いだと言うわけです。変な格好をした超高層は嫌だと言って、もっと違う生き方を中国でもしたい、違う建築が欲しいと。大きな変わり目だろうと思っています。

日本で言うと、やはり2つの大震災が転換点でした。そのあたりから、建築に対する考え方

が変わってきている。建築家のほうも変わらなければいけない。今回の建物は、そういう意味で低くして、形も抑揚がないわけです。ザハさんは、ある部分、ワーツと上がっていく抑揚がありますね。私どもの案は、行ってみると、ああ、木がいい感じだなとか、においもするのかな、よさがわかるような、そういうものができたらいいなと思っているわけです。

可動式の屋根が将来必要になったときは、いまの構造は補強しないとだめですね。可動式にすると、荷重は増えますから、下の構造も補強が必要になります。その補強にどのくらいお金がかかるかというのは、どういう可動式にするかということにもよるので、計算をしてみないとわからない。

建築というのは、使い方が変われば少しずつ直していく、だましまし直して使うのが建築でありまして、特に日本の建築は、後で間取りも変えるし、柱の位置さえも変えてしまう。木造建築のすごいのは、柱の位置も変えられるということ。これは世界で唯一のシステムです。

聖火台はどうなる？

質問 この設定の中には聖火台が含まれているのでしょうか。

隈 聖火台は、この設計には含まれていません。要項の中に聖火台が含まれていませんでした。これは開会式の演出とすごく関係があると思いますが、いまは演出家も決まっていない状態ですね。

いい聖火台ができればいいなと思っていますが、それに関しては、実はものすごいお手紙とか案が届いているのです。こういう聖火台にしたいとか、ここにこれを使ってほしいとか関心の高さを感じていますが、これはやはり演出の方が決まってからと思っています。

質問 新しい国立競技場は、都心のど真ん中で、大地震があったときの避難場所、例えば地下室もつくって、避難の用具、あるいは食料を入れるという案があったと聞きました。そういう場合の耐震性の問題、そして、あそこに 20

万人収容するといった発想などは、今回のコンペあるいは先生の設計の中に考慮されているのでしょうか。

隈 コンペの要項には20万人の話は出ておりません。我々の案では、外部に木を植えているのですが、木の下はオープンな空間にして、人が入れる柱にしています。なるべくフラットにもしています。これは、避難の点でも、人がバーッと避難するときも、そういう空間が周りにあるということが大事ですので、競技場からの避難のときも非常に役に立つ開かれた柱になっています。災害のときの空間としても避難に役に立つ空間です。開かれた柱というのは、都内で貴重な空間になると思います。近隣の人間にとっても、安心な柱ができると思います。

歌舞伎座も、3,000人が泊まれるようになってるんです。地下鉄からつながっていく地下広場をつくって、全部お店がバーッと片づけられるようになって、劇場含めて3,000人が泊まれるだけの備蓄がされています。ですので、今回もそういった話も出てくると思います。

司会 3.11の震災後に、いろいろな復興に関わって支援をされていますが、新国立の中に生きている、影響したことはありますか。

隈 3.11の後、東北をいろいろ回って、いまは特に南三陸町でいろいろ絵を描いています。地元の木を使った新しい「南三陸さんさん商店街」というのがもうすぐ工事が始まるのですが、そこで皆さんが何を考えているか、何を必要としているか、いろいろ教わりました。そうしたことが今回にはいろんな形で生かされています。

木を使うにしても、小さな工場でも作れる木を使おうと思いました。木の建築は、いま世界でブームなのですが、集成材という、木を接着して行って、1mとか2mの太さの梁ができるようになっていくのです。そうすると、コンクリートと同じような大スパンが可能になるのですが、そうした大きな集成材を作れる工場というのは限られてしまう。そうすると、みんなが参加できるという感じにならない。例えば南三陸の建物はみんな木でやりたいと、南三陸の方もおっしゃるし、南三陸の小さな工場で作れ

るようにしたいというので、細い木を組み合わせさせて作ります。今回も、使っている木はみんな、中以下の規模の工場で作れます。

これからの日本の力になっていくのは、そうした中小の工場だと考えています。

ラグビーW杯は厳しい

質問 工期を2カ月短縮して、ラグビーワールドカップに間に合ったらいいなという話にわかにあちこちから聞こえていますが、それは期待していいのでしょうか。

ザハさんが主張している著作権の問題ですが、座席の角度とか配置が似ている、柱の位置も、平面図を重ねるとかなり重なっているという現状で、柱のことにしてもどう思われるかというのと、設計JVにスタンドのことで、事前に、どのように確認をとったのかを伺いたい。

隈 まず工期は、かなり精密に工程表が作られています。どのぐらいの人数をかけていって、どのようなロジスティックでやっていくかというのは精密に計算されていて、やっとおさまったという状況です。これからさらに2カ月というのは、かなり厳しいと思います。

柱に関しては、先ほどの配列と関係して、席数の配列、避難階段の位置が決まると、一番合理的な柱の配置というのが決まってくるので、当然同じようなところに柱が立ちます。

例えば、柱を一本置きに抜いてしまうと今度は梁が大きくなってきて、非常にコストがかかってくる、天井が今度は梁の部分で低くなるなどの問題が起こります。

我々のチームでも、著作権の専門家に聞いて、全く問題ないと言われていました。

司会 先ほど控室で一筆書いていただきました。「自然に溶かす」ですね。これを解説いただいて、最後に締めていきたいと思います。

隈 自然と対立するのではなくて、自然の中に溶けていくような建築を作りたいという思いで書きました。

文責・編集部

KENGO KUMA & ASSOCIATES

新国立競技場整備事業

大成建設・梓設計・隈研吾建築都市設計事務所共同企業体

日本、東京 2015-



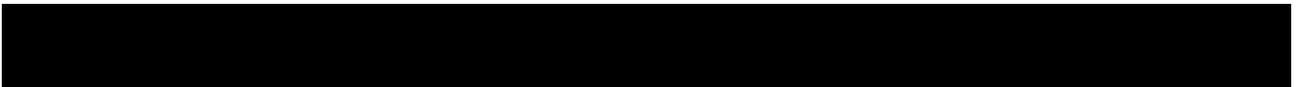
南東より鳥瞰イメージ(競技大会後30年の姿)



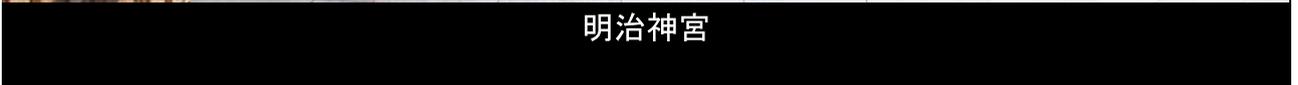
南側外観イメージ(競技大会後30年の姿)



法隆寺五重塔

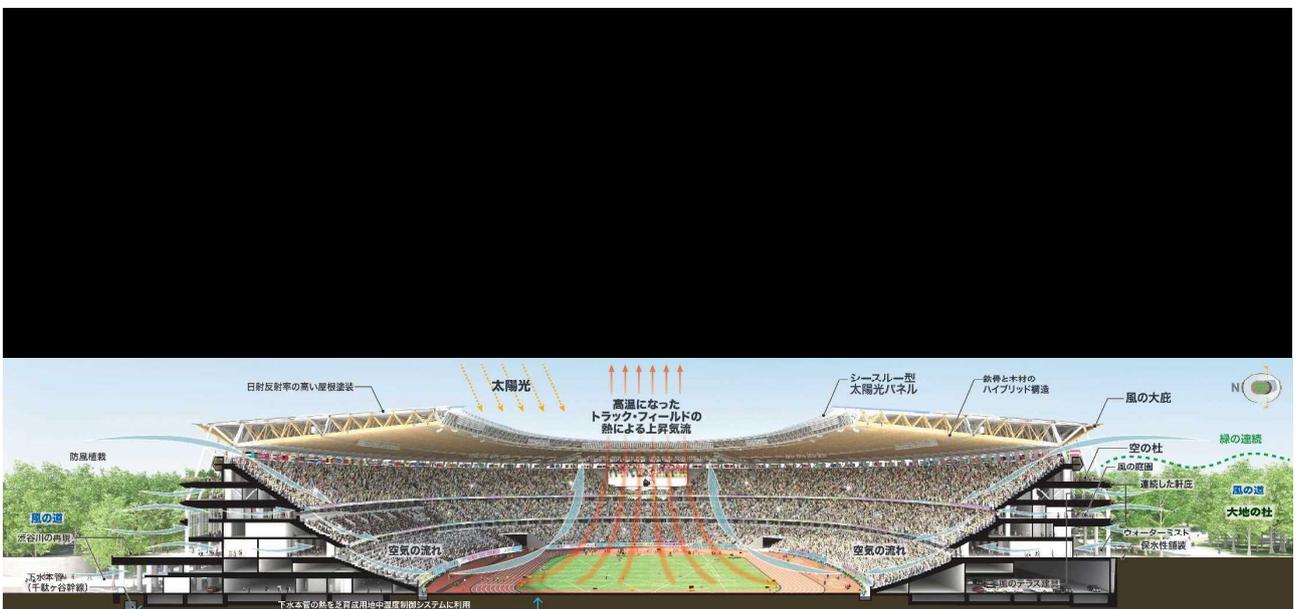


明治神宮





スタジアム内観イメージ



断面イメージ図



空の柱(イメージ)



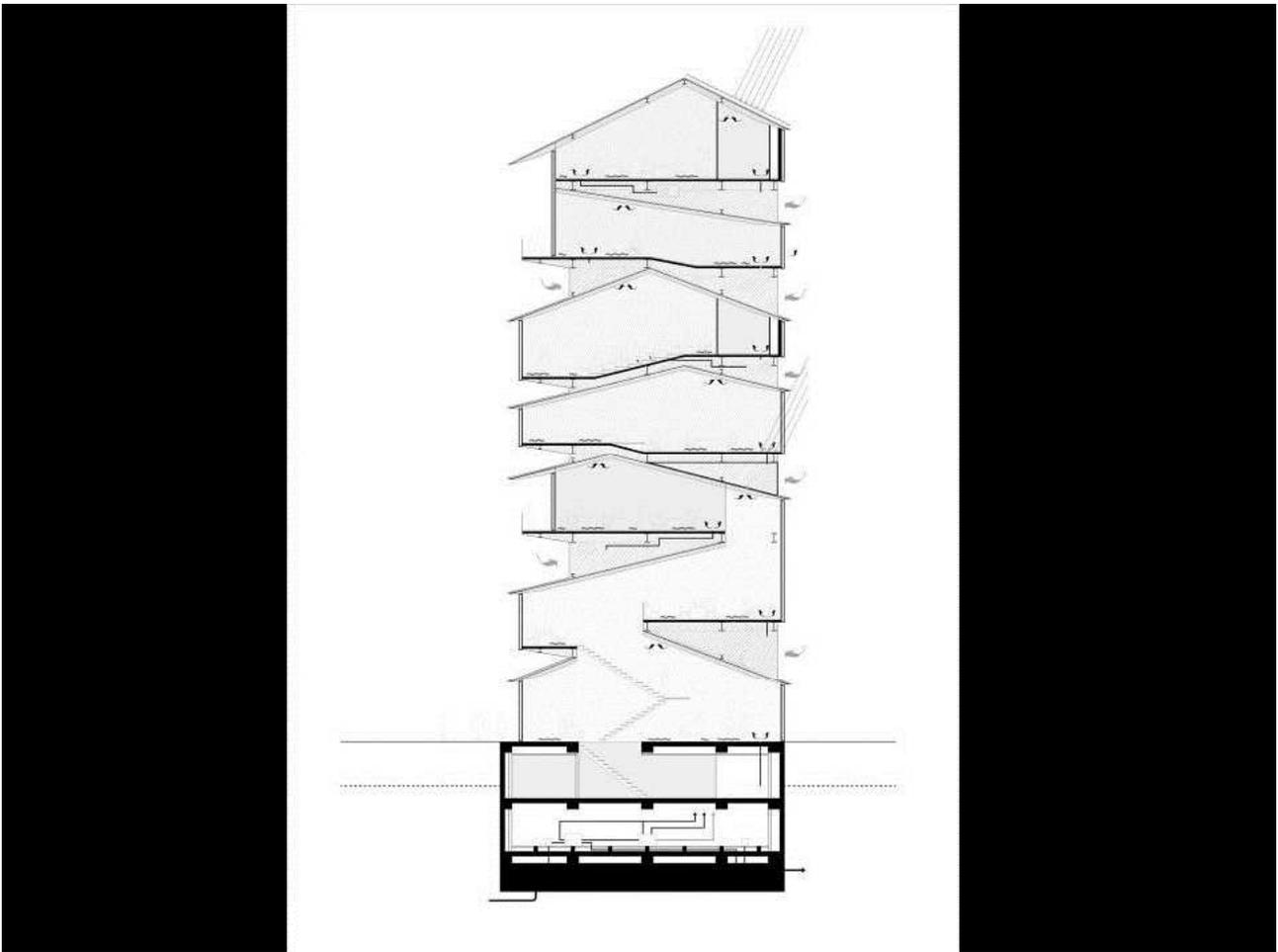
渋谷川のせせらぎ(イメージ)

浅草文化観光センター

日本、東京 2012

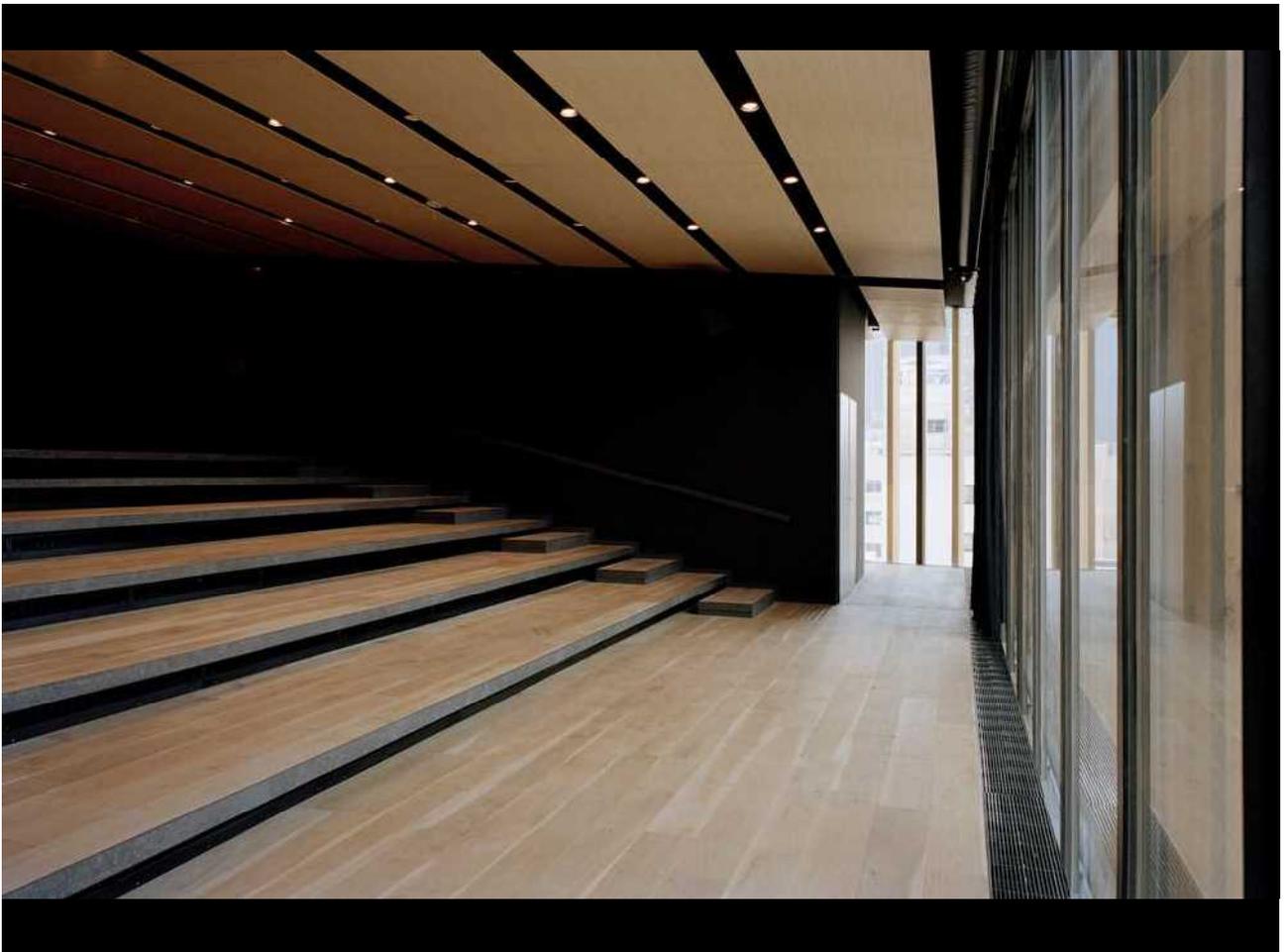
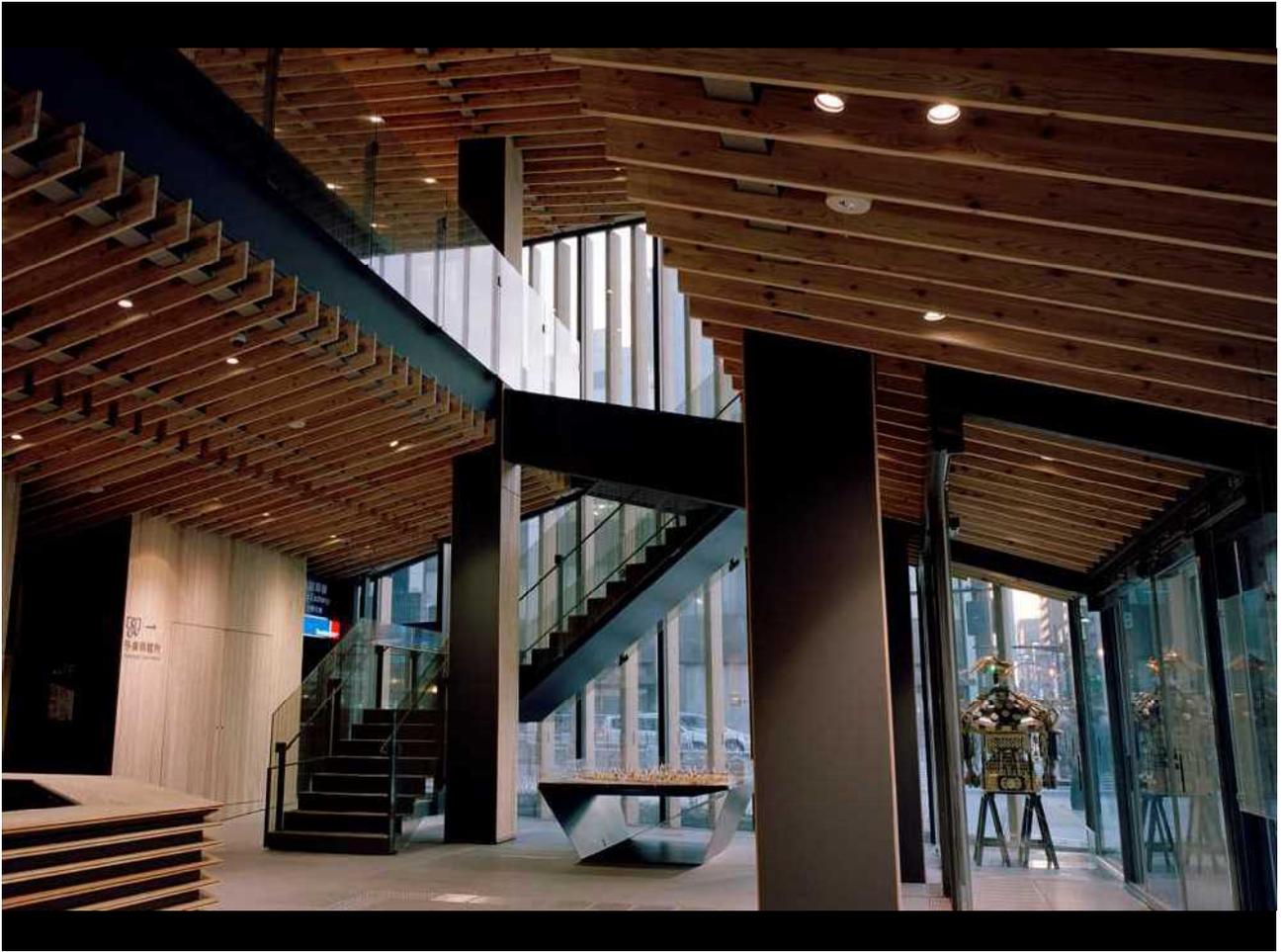


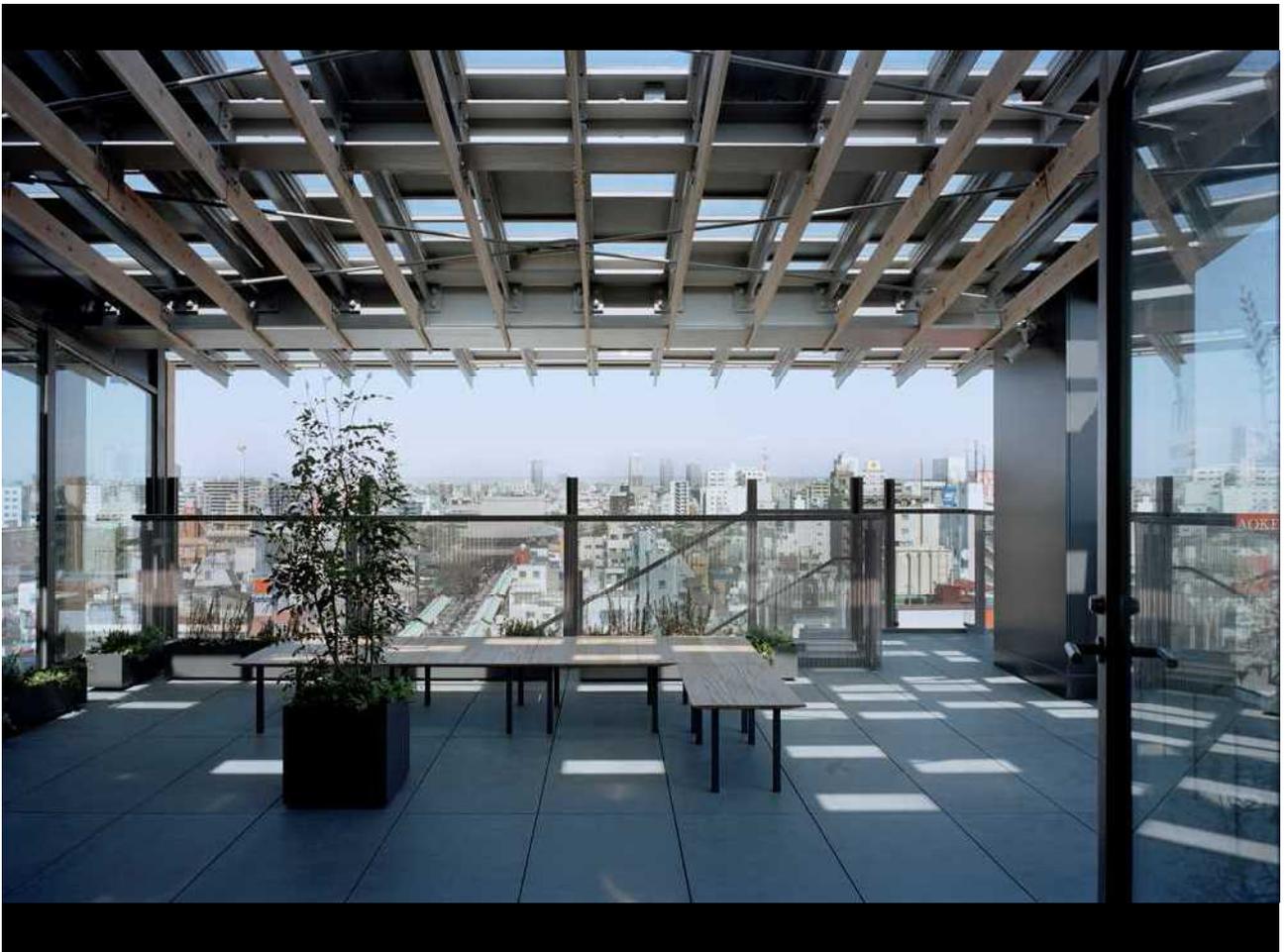
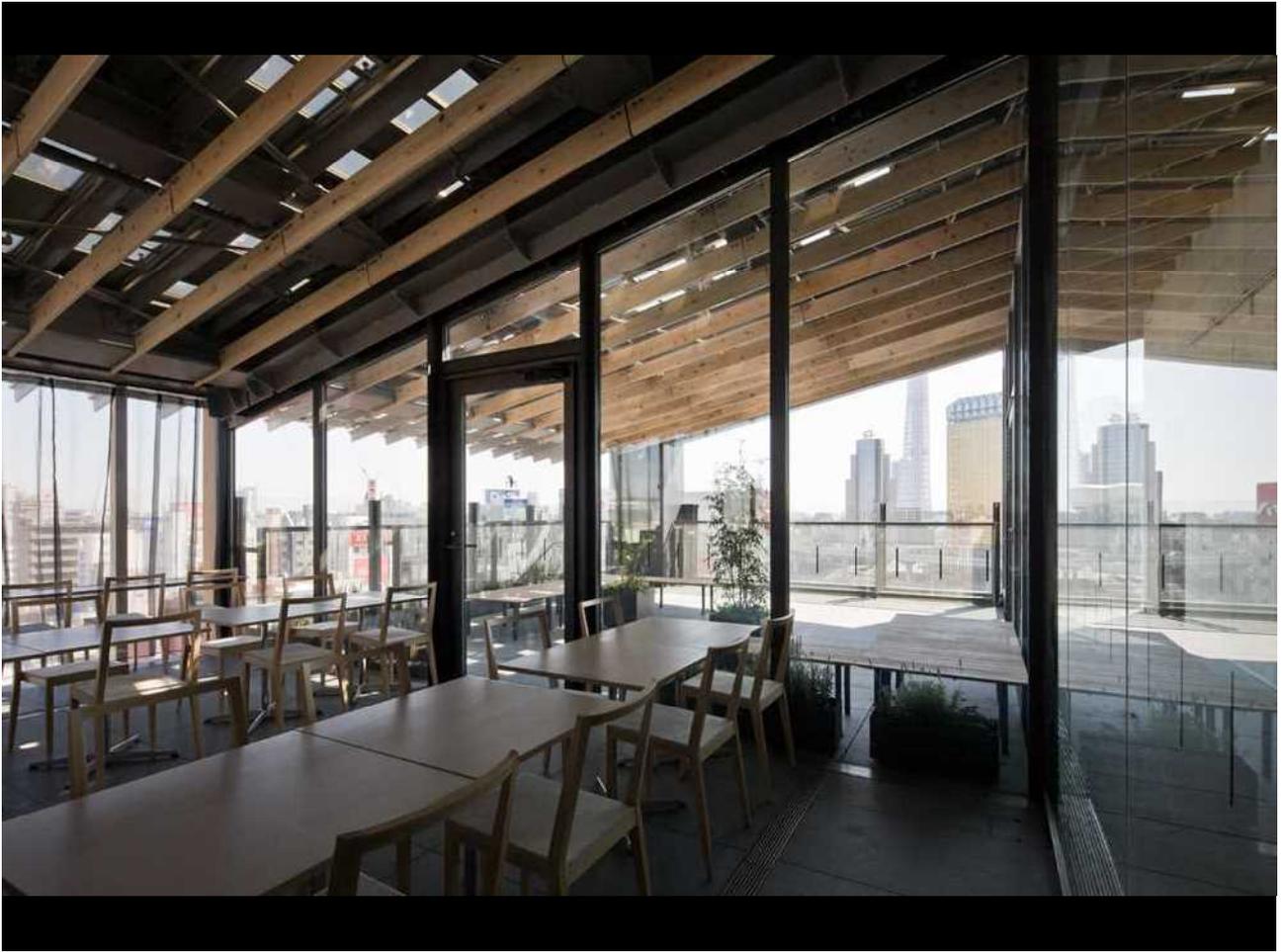








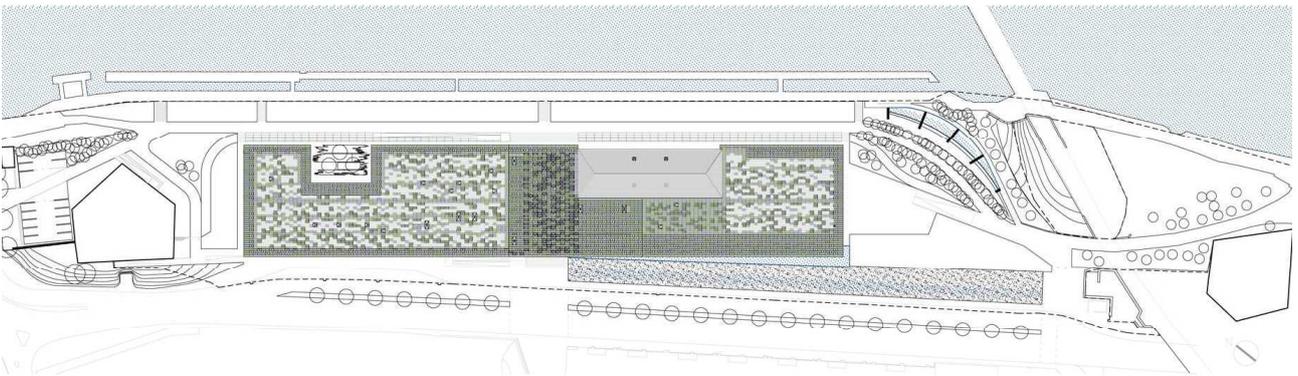
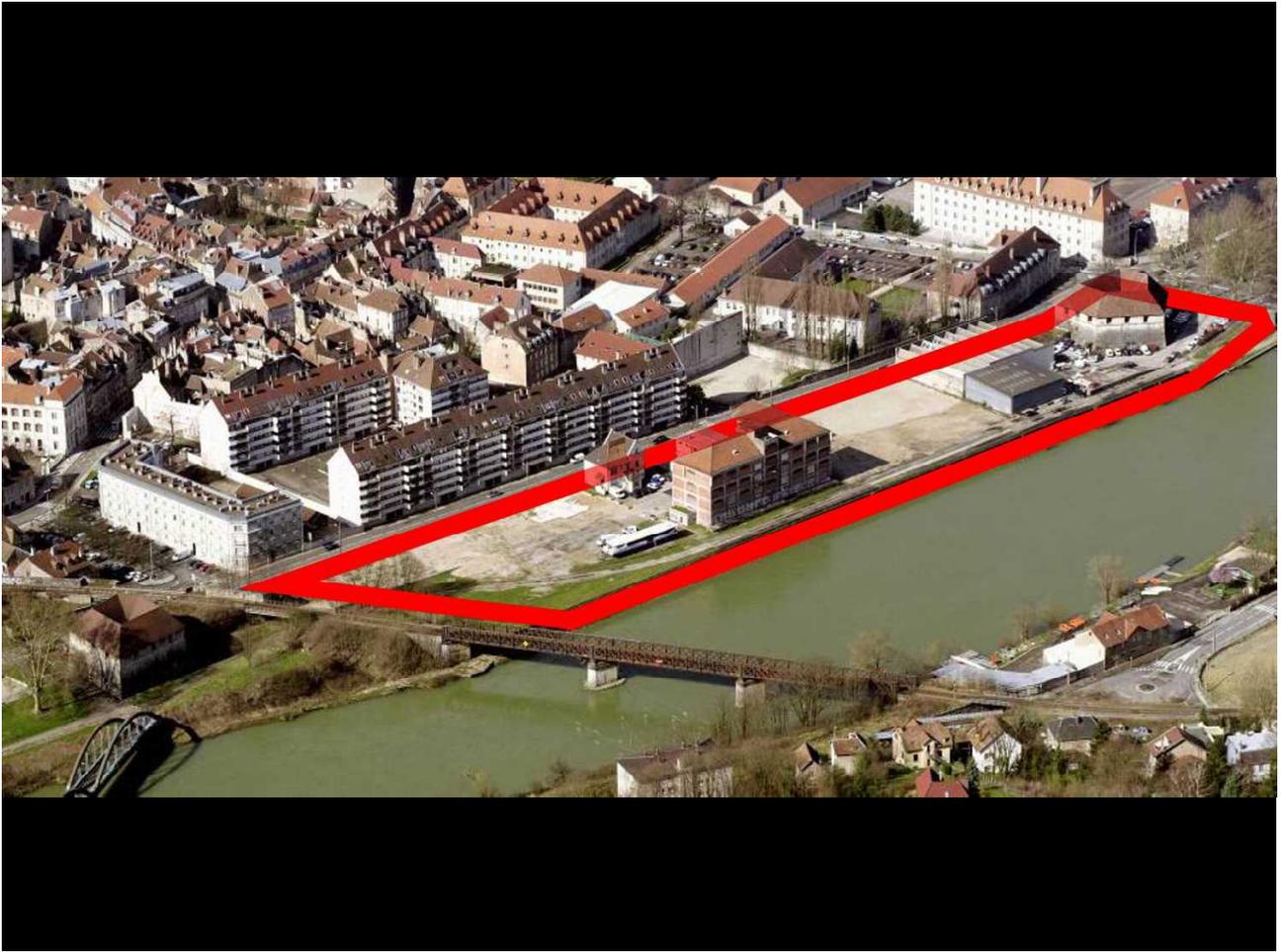


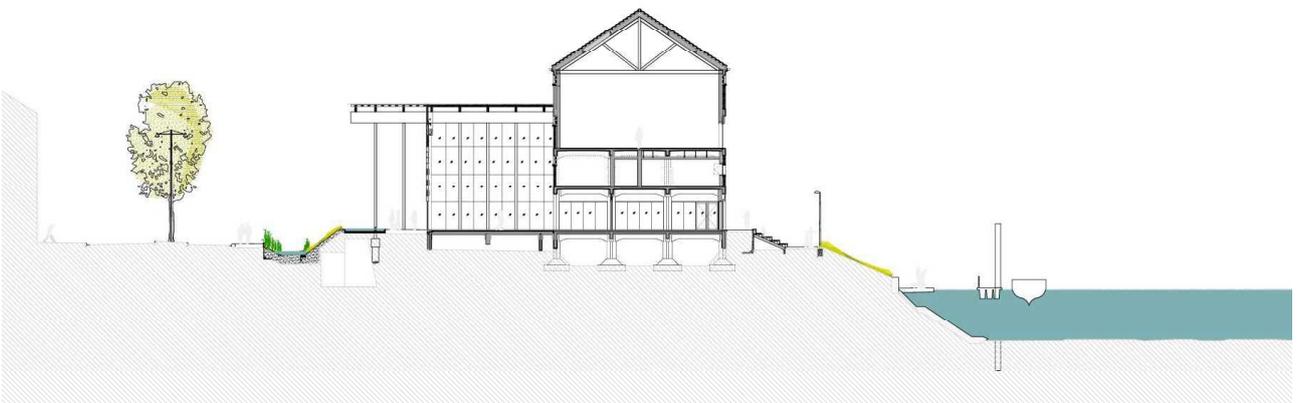
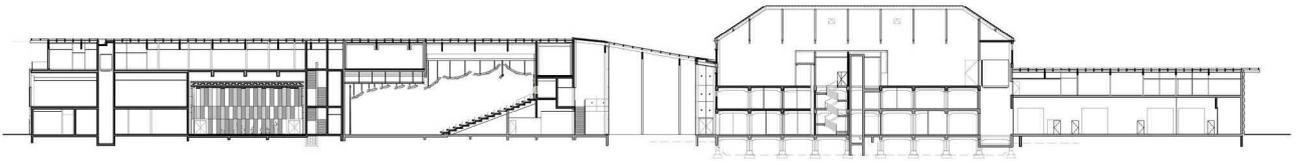
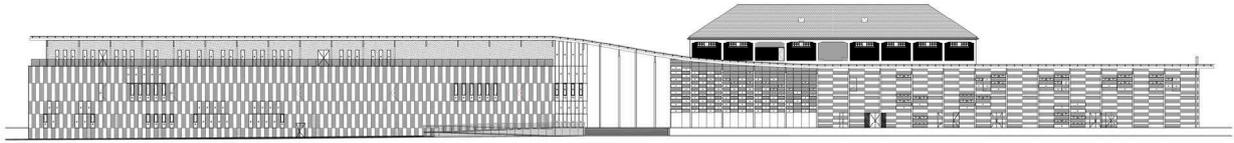


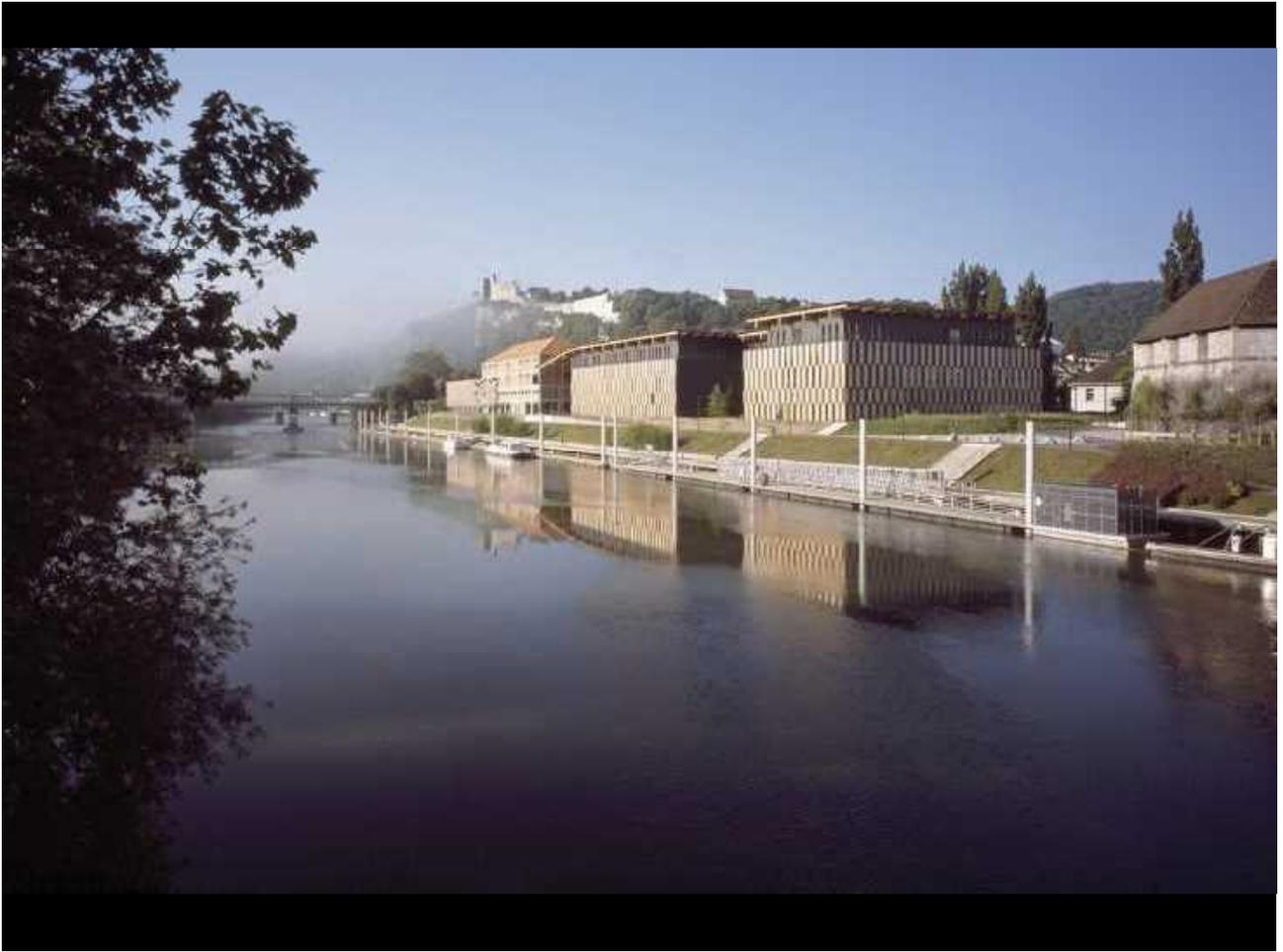


BESANCON CITY OF ARTS AND CULTURE

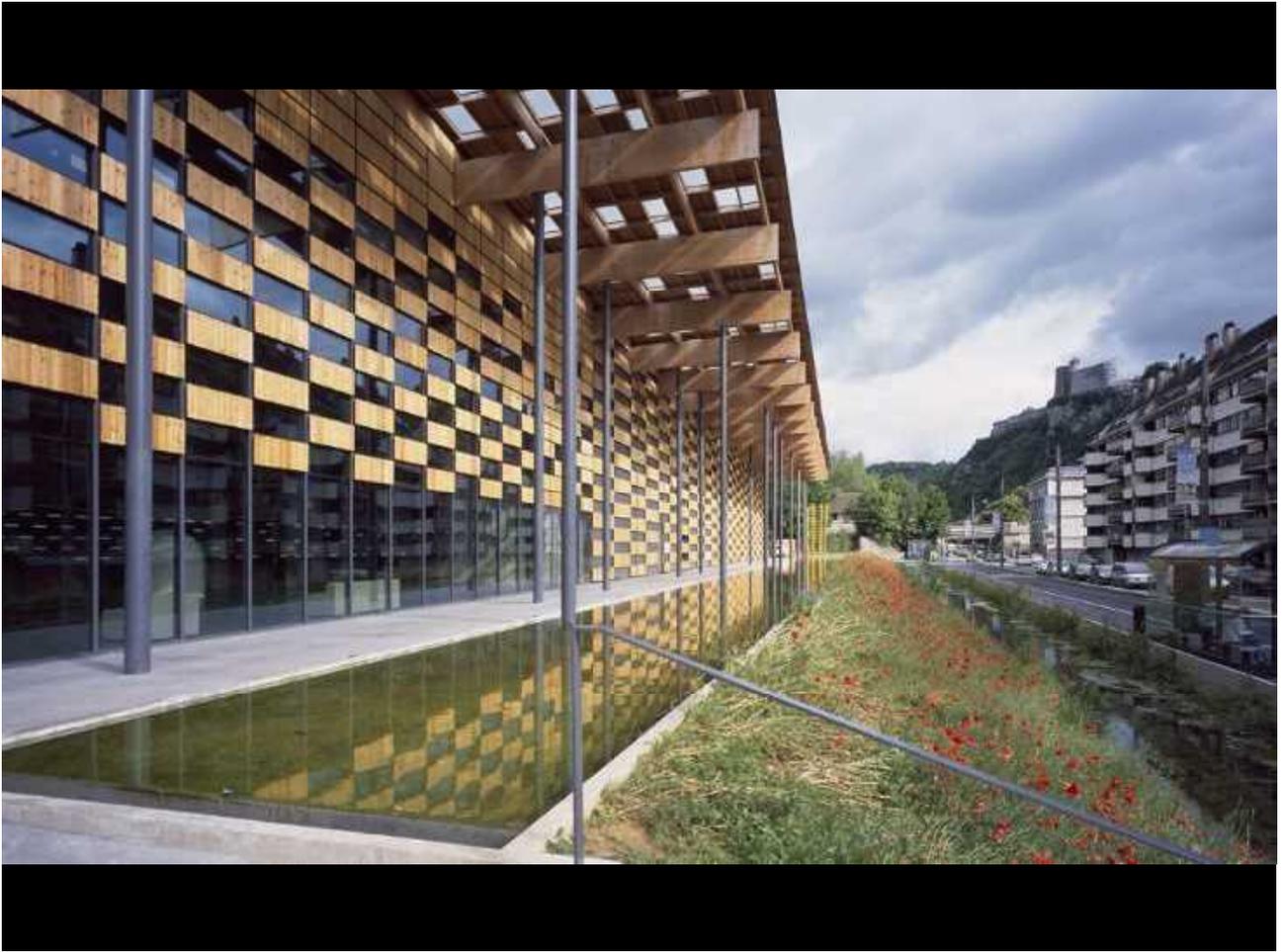
Besançon, France 2013

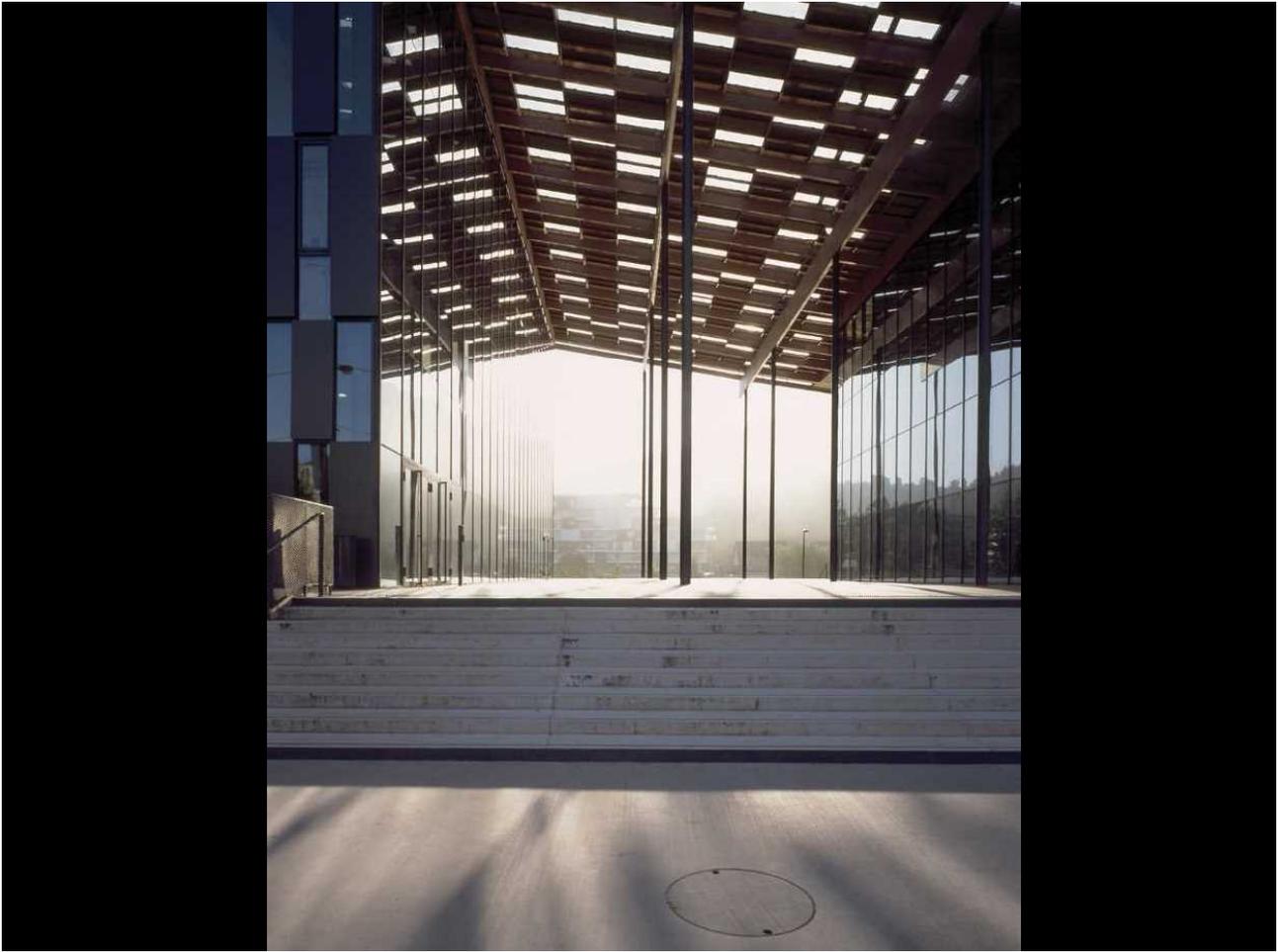


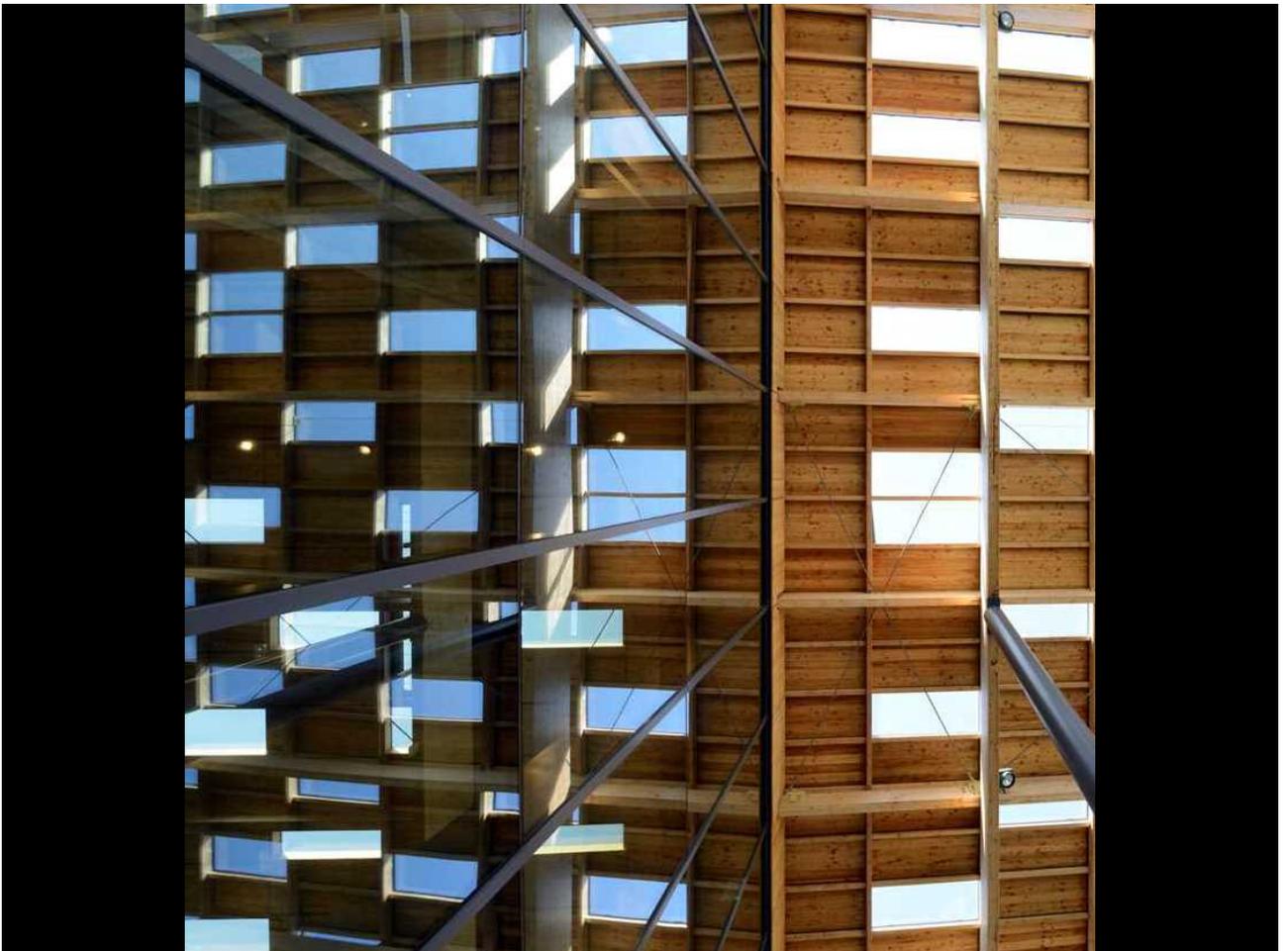


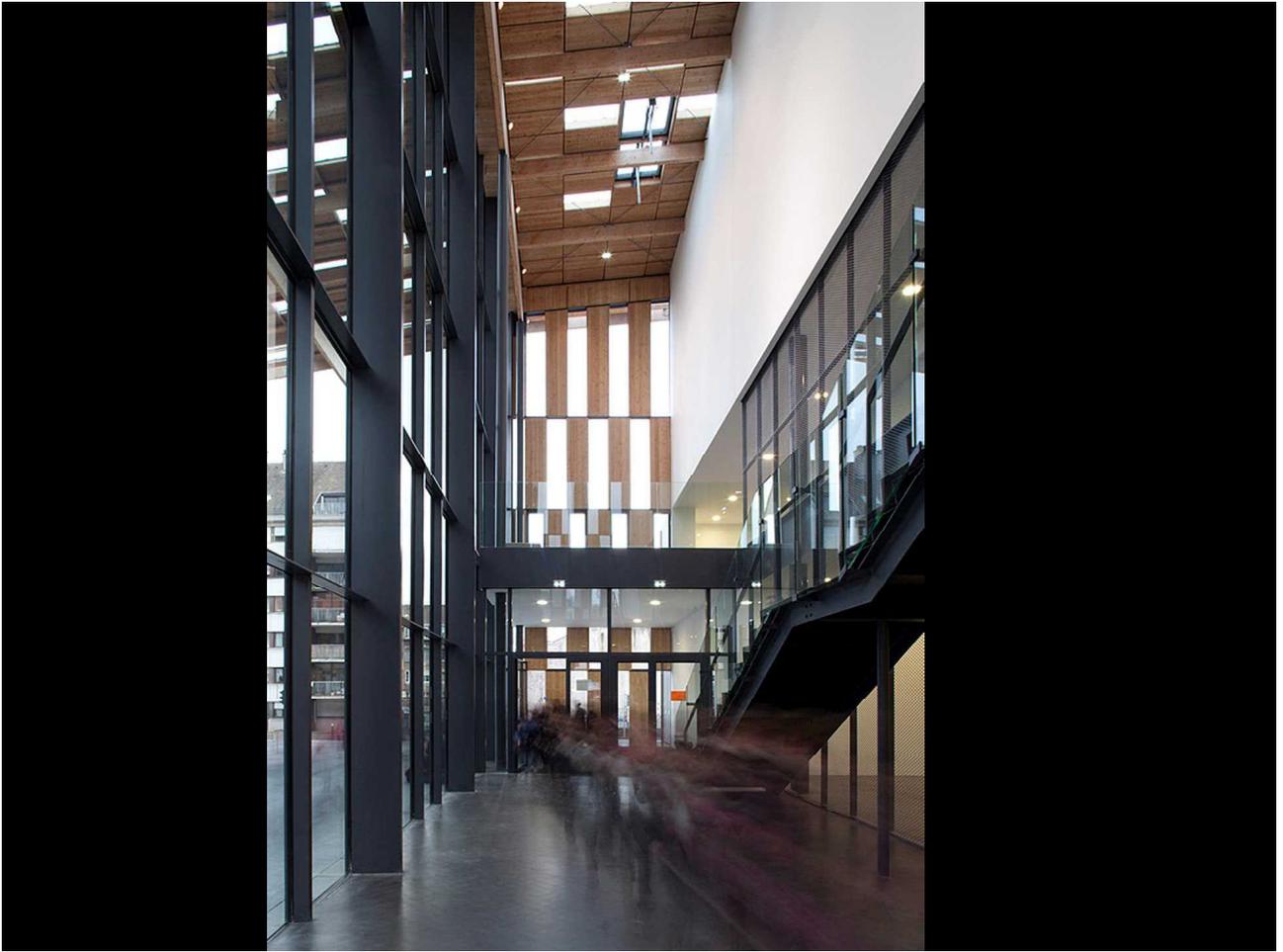


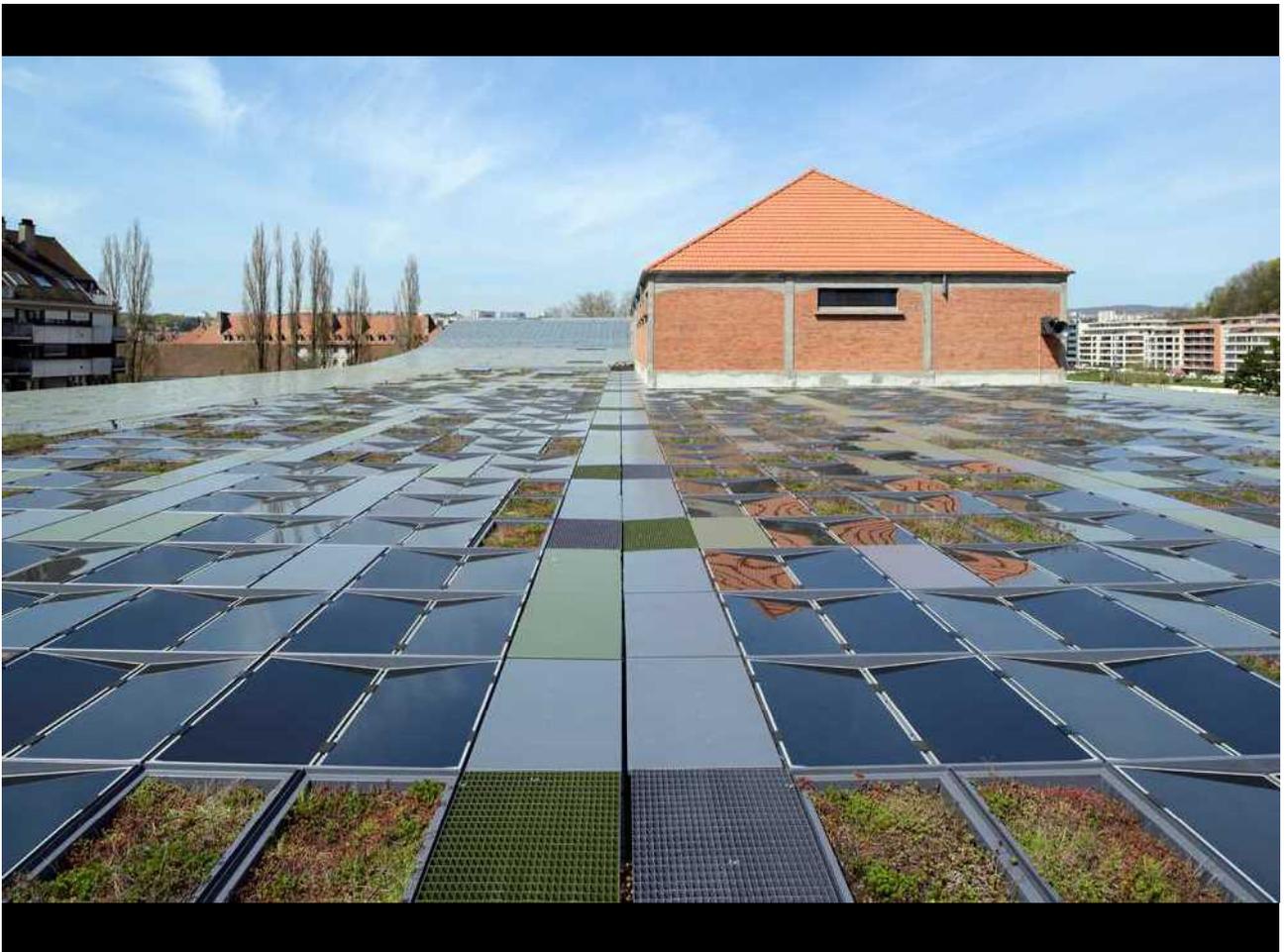
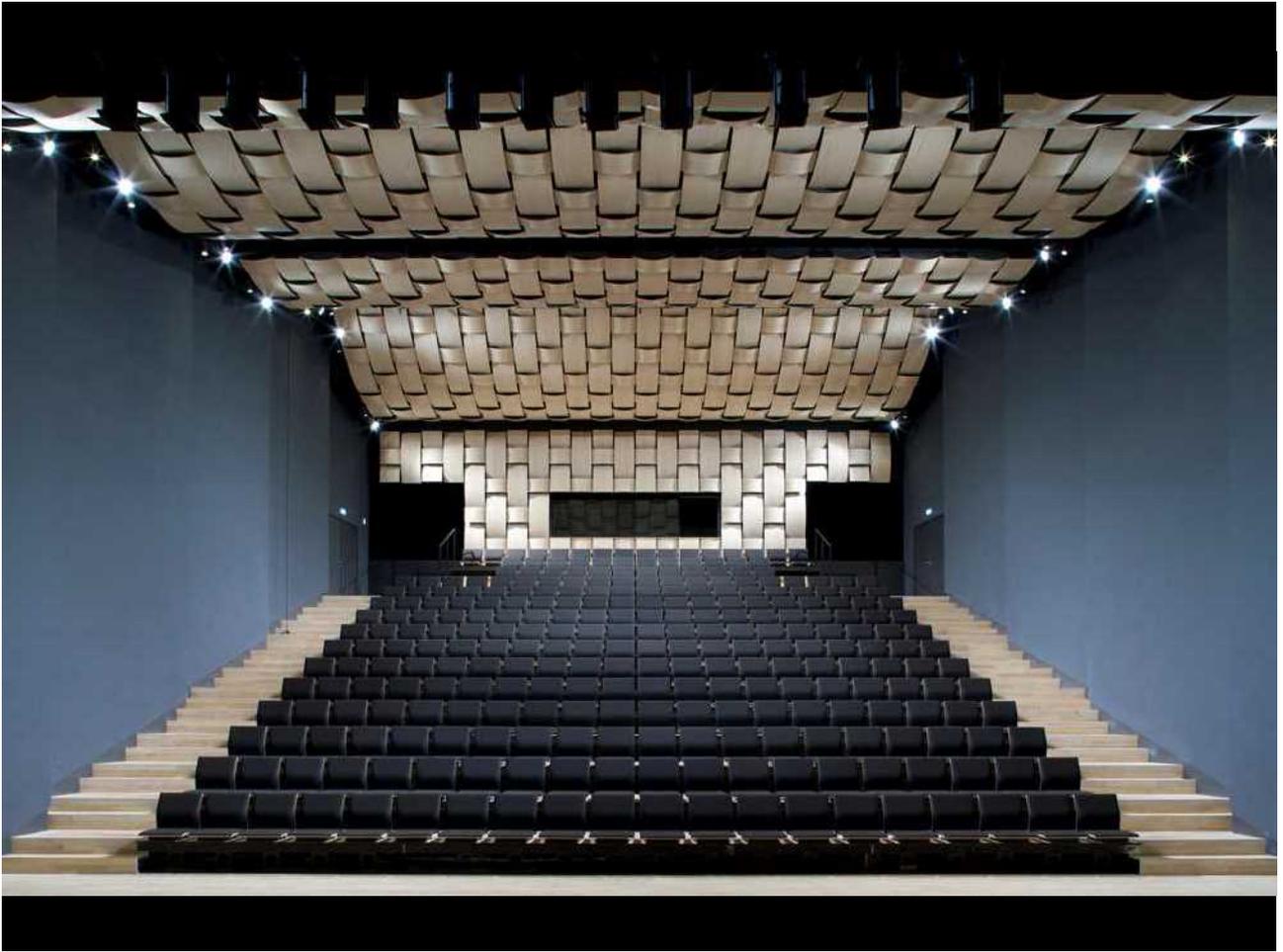












Entrepot MacDonald – Education and Sports Complex

Paris, France 2014



Entrepot MacDonald 1970

